

『古事記』から『古事記物語』へ

— 鈴木三重吉の「芸術作品」化 —

田 中 千 晶

はじめに

一 『古事記物語』とその評価

鈴木三重吉『古事記物語』は大正時代に発行されて以来、現在でも子ども向けに優しく書かれた古事記として著名な作品であろう。最新の発行は角川春樹事務所からハルキ文庫本として二〇二二年九月十八日発売¹である。裏表紙には「日本でいちばん古い歴史書といわれる『古事記』を、童話作家・鈴木三重吉が物語仕立てにしました²」と記されている。電子書籍版の商品説明では「日本を代表する児童文学者・鈴木三重吉が描くファンタジーの傑作」〔MARC〕データベースより〕等と謳われている。鈴木三重吉による「現代語訳」ではなく、あくまでも『古事記物語』とされたのは、三重吉による「再話」だからであろう。では、具体的にどのような再話されたのだろうか。

本稿では、『古事記』と最初の雑誌『赤い鳥』連載版、単行本として刊行された『古事記物語』、さらに『少年文学集』に掲載されたものを比較し、三重吉の編集態度を確認してゆく。刊行する際に必ず校正の手を入れた三重吉は、原話である『古事記』をどのように『古事記物語』へと再話したのか。三重吉が『古事記』を「芸術作品」化していった過程を検証する。

『古事記物語』の初版単行本は、「赤い鳥の本」第一冊、第二冊として、大正九（一九二〇）年十一月と十二月に発行された上下巻本である。作品は最初、雑誌『赤い鳥』に大正八（一九一九）年七月から大正九（一九二〇）年九月にかけて長期連載された。雑誌版ではまだ「古事記物語」の名ではなく、連載各回のタイトル下に「歴史童話」（目次）や「日本歴史物語」（本文）と付けられていた。単行本化の際に三重吉自身が校正し、新たに三話を追加して全十九話の上下巻に纏めた³。約百年前の発行以来、現在もおおまかに行きわたっており、読みやすい『古事記』、または口語訳代わりとして児童にも大人にも広範囲に受容された作品といえよう。

『古事記物語』は、児童文学研究者からは次のように評価されている。

- ・「彼の全童話の頂点に位置する代表作」恩田逸夫⁴
- ・「この神話の訳（むしろ再話）は、じつのところ三重吉の最も重んずるところ」瀬田貞二⁵
- ・「五十数年後の今日でもなお、最も代表的な子供向けの古事記の再話」桑原三郎⁶

このように、おおむね高い評価を得ている。さらに、評論家・森秀人は「古事記の要約という単純な作業ではなく、文学としての古事記を、少年のためにモニタージュしたこの作品は、じつに見事な完成度を示していた⁷」と評価している。

以上のように、「子供向けの古事記の再話」作品としてかなり高い評価はなされ

ている。しかしながら、原典の『古事記』から三重吉がどのように再話したのか、脚色や変更に関する具体的な言及はほぼ無い、といえる。前述の恩田論文に『古事記』との比較が見られる程度である。

二 先行研究の検証

『古事記物語』を三重吉の童話の中で最高傑作のように評価している恩田逸夫の論⁸について検証する。『古事記』原典と比較するにあたり、恩田は以下に示すように三重吉の二つの作品を用いている。

表現上の苦心の具体例として、最初に書いた「海のお宮」と、これに手を入れた「満潮の玉、干潮の玉」と、さらに原典とをならべて比較してみよう。(前者は前掲の春陽堂第12版、後者は改造社本、原典は岩波書店、日本古典文学大系の『古事記祝詞』昭36・6による)

検証に入る前に、この比較箇所について補足しておく。該当箇所はいわゆる「海幸彦と山幸彦」の部分である。三重吉が『古事記』を題材に初めて再話として採り上げたのは、実はこの部分だけであった。大正六(一九一七)年十月発行の世界童話集第五編『海のお宮』(春陽堂)に収められた「海のお宮」である。この『海のお宮』序文には

この一冊のお話は、一ばんはじめの「海のお宮」は「古事記」といふ本の中から選んだ日本の古いお話

と記されている。大正十三(一九二四)年十月発行の第十二版「前がき」では

一ばんはじめの「海のお宮」は、日本の昔のお話

と変えられており、『古事記』から選んだことが省かれた。⁹ 恩田はこの後者(第十二版)の「海のお宮」と、昭和三(一九二八)年三月発行の改造社版「古事記物語」の該当箇所である「満潮の玉、干潮の玉」、これらと『古事記』の書き下し文とを比較しているのである。冗長になるが、その全文を引用する。

A(1)「……その代りには、私の弓と矢を貸して上げますから。」と言って、いくどもくおたのみになりました。お兄さまはそのたんびに、厭だと言って(海)

(2)お兄さまは、弟さまがさう言つて三度もお頼みになつても(満)

(3)「各佐知を相易へて用ゐむ。」と謂ひて、三度、乞ひたまへども許さざりき。

(原)

B(1)毎日いくら骨をお折りになつても、一匹も釣れませんでした。そのうちに、とうとう魚に釣針を取つて行かれておしまひになりました。(海)

(2)いくらおあせりになつても一尾もお釣れに成れないばかりか、しまひには釣針を海の中へ失くしておしまひになりました。(満)

(3)火遠理命、海佐知を以ちて魚釣らすに、都て一つの魚も得たまはず、亦其の釣を海に失ひたまひき。(原)

C(1)お兄さまの命はもう釣道具をかへしてくれ、それから山の道具はこのま、私におくれと欲ばつたことをお言ひになりました(海)

(2)弟さまに向つて、「私の釣道具を返してくれ、海の獵も山の獵も、お互に馴れたものでなくては駄目だ。さあこの弓矢をかへさう。」と仰いました。

(満)

(3)其の釣を乞ひて日ひしく。山佐知も、己が佐知佐知、海佐知も、己が佐知佐知。今は各佐知返さむ。」と謂ひし時に(原)

これらの引用によればAの例で、弟が道具の交換を言い出すのが「三度」であることや、Cで、めいめいの道具をもとに戻そうとする兄のことなどは、いずれも(2)の改稿の方が原文に忠実な口語訳になっている。また(1)の初稿で、魚

に釣針を取られること(B)や、猟の道具をそのまま私にくれと欲ばること(C)は原文には見当たらない。前者は、原典で後の方に、失われた針を探すと鯛のみこんでいたという記述があるので、これに同調してつけ加えたものであろう。また、兄を欲ばり者としているのは、どうしても自分のものままの釣針を返せという要求をしただけで(もともと自分の方は決して道具の交換を望まなかったのに)満珠千珠で苦しめられるのでは、理由が薄弱なために、話のつじつまを合わせて説明的につけ加えたのだと思われる。つまり、初稿では児童の理解のための配慮からか、原文に手を加えているのであるが、やはり改稿の方が原文に忠実でしかも洗練された表現になっているようである。(引用文の傍点、恩田)

(1)が「海のお宮」、(2)が『古事記物語』、(3)が原典の『古事記』である。「表現上の苦心」という観点から三者を比較し、最初の「海のお宮」では「児童の理解のための配慮からか」『古事記』原文に手を加えたが、「改稿」の『古事記物語』の方が『古事記』に忠実であり、しかも洗練されている、との結果を導いている。A〜C以外の箇所でも「海のお宮」よりも『古事記物語』の方が『古事記』原文に近く、首肯できる説である。

ただし、問題点が二点ある。まず、恩田は「海のお宮」に最も執筆が近い(約二年後の)雑誌『赤い鳥』版と比較していない。また、初版の単行本とも比較していない。

次に、『古事記』の比較対象として適切といえるか、という点である。「海のお宮」は「日本の昔のお話」である。一方の『古事記物語』は「出来るだけ『古事記』の記述をそのまま、追従することに努力した」(『古事記物語』上巻序)という姿勢である。つまり、「海のお宮」と『古事記物語』は、昔話の紹介と『古事記』そのまま、というほどの差異があり、再話の方法、方向性が元々異なるといえる。「海のお宮」はあくまでも世界童話集の一編と捉えるべきであらう。

三 『古事記』と、比較する『古事記物語』の確認

比較すべきは、『古事記』と三重吉の『古事記物語』である。そして、『古事記物語』では、雑誌『赤い鳥』連載版と単行本、さらに『少年文学集』所収版との比較検討が必要である。『古事記』を三重吉自身の「藝術的作品として」(『古事記物語』上巻序)再話した過程に迫るためである。

「三重吉には『執拗なまでの推敲癖』があった¹¹」という。また、「自分の文章をいつまでも推敲して倦む事を知らなかった」「三重吉は、それが新聞もしくは雑誌に載ると、また必ずそれに筆を入れる。纏めて単行本にする時にも、また訂正する。更にそれが別な形で単行される時にも、更に朱を加へる。三度でも四度でも、絶えず自分の表現に磨きをかける事を懈らなかつた¹²」のである。実際に、雑誌『赤い鳥』版から単行本へ、単行本から次の『少年文学集』所収版へと、校正されている。このような三重吉の「校正癖」からも検証すれば、恩田のいう「表現上の苦心」の跡がより明確になるだろう。

ここで、三重吉が執筆するに当たって参照した『古事記』を確認しておく。三重吉は、洪川玄耳『三體古事記』(有楽社 一九一一年三月)の「俗語」(現代語訳)部分を参照したと推断される。原文、古訓(書き下し文)、俗語の三体に分けて記された書籍(図1)である。この『三體古事記』俗語訳は、洪川玄耳の「序」によれば「現代の通用語を以て對訳を試み、普通教育程度の者をして此神典を讀むことを得させようと企てた」ものであり「又、少年の閱讀すべき場合を慮つて、俗語譯に限つて省略・變更を加へた個處もある」とされる。つまり、児童も読者として想定されていたのである。

三重吉の再話方法を探るには、この『三體古事記』俗語訳からの共通点や相違点も確認すべきであらう。『三體古事記』↓雑誌『赤い鳥』版↓単行本↓『少年文学集』所収版と見てゆくことで、『古事記物語』の「成長」過程が明らかとなり、三重吉がどのような点にこだわって校正を重ねたのか、具体的な再話方法を知る手がかりとなる。

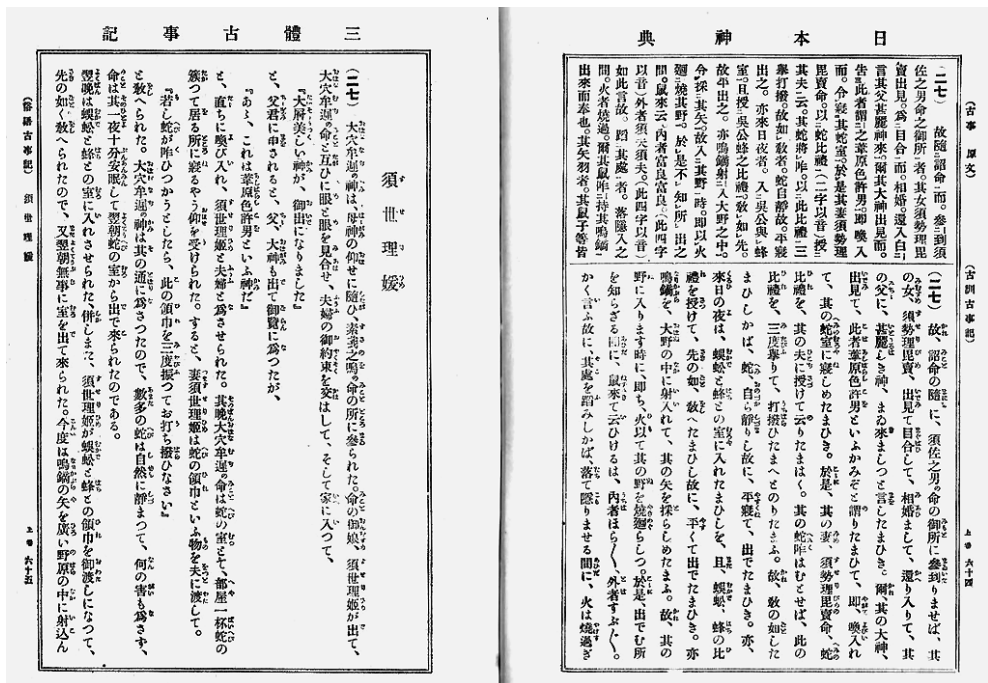


図1 渋川玄耳『三體古事記』 右上が原文、右下が訓読文(古訓古事記)、左が俗語

三重吉は『古事記物語』の「序」に「古事記」の中のお話はすつかり再話し盡され」ゆるい意味で『古事記』そのもの、口語譯として迎えられても、お互に差

四 『三體古事記』から『古事記物語』へ

しつかへはない」と記している。とはいえ、筆者が全文を検証した結果、『古事記』
 原典と比較した場合の目立った相違点として、主に次の六点が得られた。

- ① 削除や省略箇所が多い
- ② 擬音語、擬態語、繰り返し語の多用
- ③ 歌謡の削除・省略
- ④ 説明的な文章や、人物(神)の性格、心情などを追加・挿入
- ⑤ 語句の言い換え
- ⑥ 話の中での順序(流れ)変更、まとまった話題の順序変更

ここでは以上を『古事記』との相違点とする。これらを踏まえた上で、『三體古事記』と各『古事記物語』を比較してゆく。比較箇所として、次の四箇所を中心に
 行う。選択した理由も記しておく。【表1-4】

- 一、冒頭部……神名の削除及び数え間違いが表れているため。
- 二、大国主命の根の堅州国訪問……『赤い鳥』雑誌版から単行本への変更点が多い
 ため。
- 三、海幸彦と山幸彦……前述の恩田論文の再検討のため。
- 四、軽太子の段……児童への「配慮」が顕著な箇所であるため。

これら四箇所を中心に、六つの相違点を見てゆく。適宜、他の箇所も比較し用例
 を挙げる。

- ① 削除や省略箇所が多い

・冒頭部、神々の名前が削除されている。比較箇所の他にも「登場人物」として主
 要な神や天皇、大臣など以外は、雑誌に掲載する際にほぼ削除されている。なお、
 冒頭部は雑誌版で「高皇産靈の神、神産靈の神」を削除したものの単行本で復活さ
 せたのは、後の話で「高皇産靈の神」と「神産靈の神」が登場するので、ここで生
 まれたことを示すためであろう。

・神々の系譜、地名縁起譚なども削除。

・イザナギ・イザナミ神の結婚場面をはじめ、オホクニヌシとヤガミヒメとの結
 婚、子どもがいたことも削除。ヤマトタケルとミヤズヒメとの結婚も削除。③と関
 わるが、オホクニヌシとヌナカワヒメ、スセリビメの歌物語の箇所(結婚、嫉妬な

表一 『三體古事記』と各種『古事記物語』の比較 一、冒頭部

『三體古事記』(俗語訳部分)	『赤い鳥』雑誌版	『古事記物語』(単行本)	『少年文学集』所収版
<p>【天地開闢】 天地の始、高天の原にお生に為つた神の御名は、天の御中主の神。次に、高皇産靈の神。次に、神産靈の神。此の三神は、獨神にして、隱身で在らせられた。 世界まだ稚くして堅まらず、とろりとして浮油の如く、ふわりく海月の様に漂へる時に、其中から葦の芽の萌え騰る様に、お生に為つたのが、美葦牙彦舅の神。次に、天の常立の神、この二神も、みんな獨身の隱身であらせられた。 以上、五神を別天つ神といふ。 次にお生に為つたのは、国の常立の神、豊雲野の神。此の二神も亦獨身で、隱身の神様である。此からは、男、女と揃つてお生に為つた、即ち、宇泥邇の神と沙泥邇の神、角杵の神と活杵の神。大殿道の神と大殿邊の神、面足の神と綾惶根の神、伊弉諾の神と伊弉冉の神。右、国の常立の神より伊弉冉の神までを、神世七代といふ。</p>	<p>【女神の死】 世界が出来たそもくのはじめ、まづ天と地とが出来上りますと、それと一しよにわれく日本人の一ばん御先祖の、天御中主神と仰る神さまが、天の上の高天原といふところへお生れになりました。 そのときには、天も地もまだしつかり固りきらないで、両方とも、たゞ、油を浮かしたやうに、とろくになつて、水母のやうに、ふはりくくと浮んでをりました。その中へ、天御中主神についで、丁度葦の芽が生え出るやうに、四人の神さまがお生れになりました。それから次にまたお二人、その次にはお二人つゝ八人の神さまが、つぎくにお生れになつた後に、伊弉諾命と伊弉冉命と仰る男神女神がお生れになりました。</p>	<p>【女神の死】 は雑誌からの変更箇所 世界が出来たそもくのはじめ、まづ天と地とが出来上りますと、それと一しよに、われく日本人の一ばん御先祖の、天御中主神と仰る神さまが、天の上の高天原といふところへお生れになりました。その次には、高皇産靈の神、神産靈の神のお二方がお生れになりました。 そのときには、天も地もまだしつかり固りきらないで、両方とも、たゞ、油を浮かしたやうに、とろくになつて、水母のやうに、ふはりくくと浮んでをりました。その中へ、「削除」丁度葦の芽が生え出るやうに、二人の神さまがお生れになりました。 それから「削除」またお二人、その次には男神女神とお二人つゝ八人の神さまが、つぎくにお生れになつた後に、伊弉諾神と伊弉冉神と仰る男神女神がお生れになりました。</p>	<p>【女神の死】 は単行本からの変更 世界が出来たそもくのはじめ、まづ天と地とが出来上りますと、それと一しよに、われく日本人の一ばん御先祖の、天御中主神と仰る神様が、天の上の高天原といふところへお生れになりました。その次には、高皇産靈の神、神産靈の神のお二方がお生れになりました。 そのときには、天も地もまだしつかり固りきらないで、両方とも、たゞ、油を浮かしたやうに、とろくになつて、水母のやうに、ふはりくくと浮んでをりました。その中へ、丁度葦の芽が生え出るやうに、二人の神さまがお生れになりました。 それからまたお二人、その次には男神女神とお二人つゝ八人の神さまが、つぎくにお生れになつた後に、伊弉諾神と伊弉冉神と仰る男神女神がお生れになりました。</p>

ど)はすべて削除されている。

②擬音語、擬態語、繰り返し語の多用

・三重吉が新たに加えたものが多い。

・『三體古事記』と同様のものがある。冒頭の「とろり」「ふわりく」、海幸彦と山幸彦の「とうく」など。他にイザナギの黄泉国訪問で「うよく」たかる蛆、「ふさく」実る葡萄など。

③歌謡の削除・省略

・『三體古事記』では歌謡はすべて掲載されている。「俗語」部分にも歌謡が「古訓古事記」のまま掲載され、その後に「歌の大意」が書かれている。

・『古事記物語』ではほとんどの歌謡が削除され、一部が掲載されていても、その

多くは訳で示されている。訳は『三體古事記』の「大意」と酷似しているもの、「大意」からさらに短く略されているものなど、一定の基準が無いようである。¹⁴

歌謡の削除・省略に関しては単行本「序」で「少年少女諸君にとつて、さしあたり意味の少い謡を、いろいろはぶいた」「そのまゝ、意譯して少年少女諸君に興味があり、又は諸君に向くやうなものだけしか出してない」と説明されている。

④説明的な文章や、人物(神)の性格、心情などを追加・挿入

・「蛇の領巾」(『三體古事記』) ↓「或頸飾りの布」(雑誌) ↓「比禮と言つて、肩かけのやうに使ふ布」(単行本)と、校正する度に説明を詳しくしている。

・スセリビメが「大國主神のことをほんとに美しいよい方だとすぐに大好きにお思ひになり」、「意地の悪い」スサノヲが「それとはあべこべに、一つこの若い神を困

表二 『三體古事記』と各種『古事記物語』の比較 二、大國主命の根の堅州国訪問

『三體古事記』(俗語訳部分)	『赤い鳥』雑誌版	『古事記物語』(単行本)	『少年文学集』所収版
<p>【須世理媛】 大穴牟遲の神は、母神の仰せに随ひ、素戔之鳴の命の所に參られた。命の御娘、須世理媛が出て、大穴牟遲の命と互ひに眼と眼を見合せ、夫婦の御約束を交はして、そして家に入つて、 『大層美しい神が、御出になりました』 と、父君に申されると、父、大神も出て御覽に為つたが、 『あ、これは葦原色許男といふ神だ』 と、直ちに喚び入れ、須世理媛と夫婦と為させられた。其晩大穴牟遲の命は蛇の室とて、部屋一杯蛇の簇つて居る所に寝るやう仰を受けられた。すると、妻須世理媛は蛇の領巾といふ物を夫に渡して。 『若し蛇が咋ひつかうとしたら、此の領巾を三度振つてお打ち撥ひなさい』 と教へられた。大穴牟遲の神は其の通に為さつたので、數多の蛇は自然に静まつて、何の害も為さず、命は其一夜十分安眠して翌朝蛇の室から出て來られたのである。</p>	<p>【むかでの室、蛇の室】 大國主神は、言はれたとほりに、命のお出でになるところへ着きました。すると、命のお子さまの須勢理媛がお取次ぎに出て入らしめて、「お父上さま、きれいな神が入らつしやいました。」とお言ひになりました。お父上の大神は、急いで御自分で出て御覽になつて、「あ、あれは、大國主といふ神だ」と仰つて、早速および入れになりました。媛は大國主神のことをほんとに美しいよい方だとすぐに大好きにお思ひになりました。ところが、意地の悪い大神は、それとはあべこべに、一つこの若い神を困らせてやらうとお思ひになつて、その晩、大國主神を、蛇の室と言つて、大蛇小蛇が一ぱいたかつてある気味の悪いお部屋へお寝かせになりました。さうすると、やさしい須勢理媛は、それを氣の毒に思つて、或頸飾りの布を、そつと大國主神にわたして、「もし蛇が喰ひつきにまゐりましたら、この布を三度ふつて追ひのけておしまひなさい。」と仰いました。問もな、蛇はみんなで鎌首を立て、ぞろ／＼と向つて來ました。大國主神は早速言はれたとほりに、飾りの布を三度ふりました。すると不思議にも、蛇はひとりでに引きかへして、そのままじつとかたまつたなり、一晩中、なんにも害をしませんでした。若い神はおかげで、氣楽にぐつすり寐て、朝になると、當たりまへの顔をして、大神の前に出て來ました。</p>	<p>【むかでの室、蛇の室】 大國主神は、言はれたとほりに、命のお出でになるところへ着きました。すると、命のお娘御の須勢理媛がお取次ぎをなすつて、「お父上さま、きれいな神が入らつしやいました。」とお言ひになりました。 お父上の大神は、それをお聞きになると、急いで御自分で出て御覽になつて、 「あ、あれは、大國主といふ神だ」と仰いました。そして、早速および入れになりました。媛は大國主神のことをほんとに美しいよい方だとすぐに大好きにお思ひになりました。大神には、第一それがお氣に召しませんでした。それでは、一つこの若い神を困らせてやらうとお思ひになつて、その晩、大國主神を、蛇の室と言つて、大蛇小蛇が一ぱいたかつてある気味の悪いお部屋へお寝かせになりました。さうすると、やさしい須勢理媛は、大層氣の毒にお思ひになりました。それでご自分の、比禮と言つて、肩かけのやうに使ふ布を、そつと大國主神におわたしになつて、 「もし蛇が喰ひつきにまゐりましたら、この布を三度ふつて追ひのけておしまひなさい。」と仰いました。</p>	<p>【むかでの室、蛇の室】 大國主神は、言はれたとほりに、命のお出でになるところへ着きました。すると、命のお娘御の須勢理媛がお取次ぎをなすつて、「お父上さま、きれいな神が入らつしやいました。」とお言ひになりました。 お父上の大神は、それをお聞きになると、急いで御自分で出て御覽になつて、 「あ、あれは、大國主といふ神だ」と仰いました。そして、早速および入れになりました。媛は大國主神のことをほんとに美しいよい方だとすぐに大好きにお思ひになりました。大神には、第一それがお氣に召しませんでした。それでは、一つこの若い神を困らせてやらうとお思ひになつて、その晩、大國主神を、蛇の室と言つて、大蛇小蛇が一ぱいたかつてある気味の悪いお部屋へお寝かせになりました。さうすると、やさしい須勢理媛は、大層氣の毒にお思ひになりました。それでご自分の、比禮といつて、肩かけのやうに使ふ布を、そつと大國主神におわたしになつて、 「もし蛇が喰ひつきにまゐりましたら、この布を三度ふつて追ひのけておしまひなさい。」と仰いました。</p>

表三 『三體古事記』と各種『古事記物語』の比較 三、海幸彦と山幸彦

『三體古事記』(俗語訳部分)	『赤い鳥』雑誌版	『古事記物語』(単行本)	『少年文学集』所収版
<p>【海幸山幸】 兄、火照の命は、海幸彦として、海の漁が上手で能く、大小の魚類を捕り、弟、火遠理の命は、山幸彦として、山の獵が上手で、能く、大小の獸類を捕らせられた。或る時、火遠理の命は、兄様に向つて互に幸(獵具)を換へて、漁獵をして見ようと申された。三度まで、さう言つて頼んだけれども兄様は御承知なかつたが、とうとう終にやつと換させられることになつた。</p>	<p>【笠沙の宮】 その御兄弟は間もなく大きな若い人におなりになりました。その中でお兄さまの火照命は、海で漁をなさるのが大變にお上手で、いつもいんな大きな魚や小さな魚を澤山釣つてお歸りになりました。弟さまの火遠理命は、これは又、山で獵をなさるのがそれは、お得意で、しじゅういろいろな鳥や獸をどつさり捕つてお歸りになりました。</p>	<p>【満潮の玉、干潮の玉】 三人の御兄弟は間もなく大きな若い人におなりになりました。その中でお兄さまの火照命は、海で漁をなさるのが大變にお上手で、いつもいんな大きな魚や小さな魚を澤山釣つてお歸りになりました。末の弟さまの火遠理命は、これは又、山で獵をなさるのがそれは、お得意で、しじゅういろいろな鳥や獸をどつさり捕つてお歸りになりました。</p>	<p>【満潮の玉、干潮の玉】 三人の御兄弟は間もなく大きな若い人におなりになりました。その中でお兄さまの火照命は、海で漁をなさるのが大變にお上手で、いつもいんな大きな魚や小さな魚を澤山釣つてお歸りになりました。末の弟さまの火遠理命は、これは又、山で獵をなさるのがそれは、お得意で、しじゅういろいろな鳥や獸をどつさり捕つてお歸りになりました。</p>
<p>そこで、火遠理の命は海の漁具を以て、魚を釣らせられるけれども、一向に釣れないのみならず、其の釣鉤まで魚に取られて失くしてしまひになつた。兄、火照の命も、慣れぬ弓矢の山獵に、何も取れなかつたので、 『海漁も、山獵も、銘々の慣たものでなく、ては駄目だ、さあ換へ戻さうよ。』 と謂つて、弓矢を弟に返し、自分の釣を請求なされた。火遠理の命は。 『あなたの釣で、魚を釣つた處が一つも釣れないで、釣は失くしました。』 と申されたが、兄様は、是非とも釣を返せと厳しく催促なされた。</p>	<p>或とき弟の命は、お兄さまに向つて、 「一つためしに二人で道具を取りかへて、互に持ち場をかへて獵をして見ようではありませんか。」と仰いました。お兄さまは弟さまがさう言つて三度もお頼みになつても、たんに厭だと言つてお聞入れになりませんでした。併し弟さまが、あんまりうるさく仰るものですか、とうとうしまひに、厭々ながらお取りかへになりました。弟さまは、早速釣道具を持つて海ばたへお出かけになりました。併し、釣の方は全でお勝手がちがふので、いくらおあせりになつても一匹もお釣りになれないばかりか、しまひには釣針を海の中へ亡くしておしまひになりました。それと同じやうにお兄さまの命は山の獵にはお馴れにならないのですから、一向に獲物がなないので、がっかりなすつて、弟さまに向つて、「私の釣道具を返して、海の獵も山の獵も、お互に馴れたものでなく、ては駄目だ。さあこの弓矢をかへさう。」と仰いました。</p>	<p>或とき弟の命は、お兄さまに向つて、 「一つためしに二人で道具を取りかへて、互に持ち場をかへて獵をして見ようではありませんか。」と仰いました。 お兄さまは弟さまがさう言つて三度もお頼みになつても、そのたんに厭だと言つてお聞入れになりませんでした。併し弟さまが、あんまりうるさく仰るものですか、とうとうしまひに、厭々ながらお取りかへになりました。弟さまは、早速釣道具を持つて海ばたへお出かけになりました。併し、釣の方は全でお勝手がちがふので、いくらおあせりになつても一匹もお釣りになれないばかりか、しまひには釣針を海の中へ亡くしておしまひになりました。</p>	<p>或とき弟の命は、お兄さまに向つて、 「一つためしに二人で道具を取りかへて、互に持ち場をかへて獵をして見ようではありませんか。」と仰いました。 お兄さまは弟さまがさう言つて三度もお頼みになつても、そのたんに厭だと言つてお聞入れになりませんでした。併し弟さまが、あんまりうるさく仰るものですか、とうとうしまひに、厭々ながらお取りかへになりました。弟さまは、早速釣道具を持つて海ばたへお出かけになりました。併し、釣の方は全でお勝手がちがふので、いくらおあせりになつても一匹もお釣りになれないばかりか、しまひには釣針を海の中へ失くしておしまひになりました。</p>
<p>「私とはんだことをいたしました。とうとう魚を一匹も釣らないうちに、針を海へ落してしまひました。」と仰いました。するとお兄さまは大變にお怒りになつて、無理にもその針をさがして来いと仰いました。</p>	<p>「私とはんだことをいたしました。とうとう魚を一匹も釣らないうちに、針を海へ落してしまひました。」と仰いました。するとお兄さまは大變にお怒りになつて、無理にもその針をさがして来いと仰いました。</p>	<p>「私とはんだことをいたしました。とうとう魚を一匹も釣らないうちに、針を海へ落してしまひました。」と仰いました。するとお兄さまは大變にお怒りになつて、無理にもその針をさがして来いと仰いました。</p>	<p>「私とはんだことをいたしました。とうとう魚を一匹も釣らないうちに、針を海へ落してしまひました。」と仰いました。するとお兄さまは大變にお怒りになつて、無理にもその針をさがして来いと仰いました。</p>
<p>「私とはんだことをいたしました。とうとう魚を一匹も釣らないうちに、針を海へ落してしまひました。」と仰いました。するとお兄さまは大變にお怒りになつて、無理にもその針をさがして来いと仰いました。</p>	<p>「私とはんだことをいたしました。とうとう魚を一匹も釣らないうちに、針を海へ落してしまひました。」と仰いました。するとお兄さまは大變にお怒りになつて、無理にもその針をさがして来いと仰いました。</p>	<p>「私とはんだことをいたしました。とうとう魚を一匹も釣らないうちに、針を海へ落してしまひました。」と仰いました。するとお兄さまは大變にお怒りになつて、無理にもその針をさがして来いと仰いました。</p>	<p>「私とはんだことをいたしました。とうとう魚を一匹も釣らないうちに、針を海へ落してしまひました。」と仰いました。するとお兄さまは大變にお怒りになつて、無理にもその針をさがして来いと仰いました。</p>

表四 『三體古事記』と各種『古事記物語』の比較 四、軽太子の段

『三體古事記』(俗語訳部分)	『赤い鳥』雑誌版	『古事記物語』(単行本)	『少年文学集』所収版
<p>【允恭天皇、軽太子の段】 天皇がお崩れになつた後、木梨の軽の太子が、御位を繼がせられることに定つて居たのであるが、未だ位に即かぬうちに、同母妹、軽の大郎女と不倫の關係を結ばれた、其に就いて詠ませられた歌。 (歌謡 二首省略)</p>	<p>【大鈴小鈴】 天皇がおか／＼れになつたおあとには、一番上の皇子の、木梨の軽皇子がお位におつきになるといふことに決つてをりました。ところが王は、御即位になるまへに、お身持ちの上について、或言ふに言はれない間違ひごとをなすつたので、朝廷のすべての役人や下々の人民たちがみんな王をお厭ひ申して、弟さまの穴徳王の方へ附いてしまひました。軽皇子はこれでは、うっかりしてゐると、穴徳王方からどんなことを仕向けるかも分らないとお怖れになつて、大前宿禰、小前宿禰といふ、兄弟二人の大臣の家へお遁げ込みになりました。</p>	<p>【大鈴小鈴】 天皇がおか／＼れになつたおあとには一番上の皇子の、木梨軽皇子がお位におつきになるといふことに決つてをりました。ところが皇子は御即位になるまへに、お身持ちの上について、或言ふに言はれない間違ひごとをなすつたので、朝廷のすべての役人や下々の人民たちがみんな王をお厭ひ申して、弟さまの穴徳王の方へ附いてしまひました。軽皇子はこれでは、うっかりしてゐると、穴徳王方からどんなことを仕向けるかも分らないとお怖れになり、大前宿禰、小前宿禰といふ、兄弟二人の大臣の家へお遁げ込みになりました。</p>	<p>【大鈴小鈴】 天皇がおか／＼れになつたおあとには一番上の皇子の、木梨軽皇子がお位におつきになるといふことに決つてをりました。ところが皇子は御即位になるまへに、御身持ちの上について、或言ふに言はれない間違ひごとをなすつたので、朝廷のすべての役人や下々の人民たちがみんな皇子をお厭ひ申して、弟さまの穴徳王の方へ附いてしまひました。軽皇子はこれでは、うっかりしてゐると、穴徳王方からどんなことを仕向けるかも分らないとお怖れになり、大前宿禰、小前宿禰といふ、兄弟二人の大臣の家へお遁げ込みになりました。</p>

らせてやらうとお思ひに」なる(雑誌)など。単行本では「意地の悪い」を消し、娘のササノヲに対する気持ち「氣に入らなかつた」と変えている。

⑤ 語句の言い換え

・ 軽太子と軽大郎女の關係「同母妹、軽の大郎女と不倫の關係」(『三體古事記』)

↓「或言ふに言はれない間違ひごと」(雑誌)

・ 「胸乳を掛出て、裳諸を蕃登に忍垂れき」(『古訓古事記』) ↓「乳房を露はし、裳の緒を、押下げて」(『三體古事記』) ↓「おしまひには、お乳や脛も全だしにして」(雑誌) ↓「お乳もお腹も股も全だしにして」(単行本)

・ ヤマトタケルの「妃」であるオトタチバナヒメ ↓「お召し使ひ」(雑誌、単行本)

これらの語句に関しては単行本「序」で「小さい人たちの読みものとして、或、人間的交渉の叙述に、止むなき手加減を加へた」と説明されている。複数の妃の存在や性的交渉に関する文章を指すと考えられる。

⑥ 話の中の順序(流れ)変更、まとまつた話題の順序変更

・ 話を時系列に整理し直す。(三輪山伝説)

・ 関連した話題をまとめる。(仲哀天皇段・仁徳天皇段)

「海幸彦と山幸彦」部分に関しては、『三體古事記』と比較するとかなり噛み砕いた文章になっている。共通点を挙げると「とうとうしまいに」が全く同じである。

「海の猟も山の猟も、お互に馴れたものでなくては駄目だ」は、酷似した表現だろう。恩田のいう『古事記物語』の方が「原文に忠実な口語訳」というよりは、『三體古事記』を参照に真似た箇所がある、が妥当であろう。

四箇所を中心に比較し相違点を確認したが、これら以外に『古事記物語』全体を通して得られた変化の流れをまとめておきたい。

【『三體古事記』から雑誌版へ】

- ・ 全体的に、本筋に関わらない箇所の削除・省略が多い。
- ・ 同じ表現、似通つた表現も多いが、さらにわかりやすく言い換え、説明を加えたと思われる箇所も多い。
- ・ 『三體古事記』の割注を用いて説明を加えている場合もある。
- ・ 擬音語、擬態語、繰り返し語には『三體古事記』の表現をそのまま利用したものがある。

・ 歌謡は三重吉の主観で取捨選択されている。記載方法(改行有り/無し、意識、

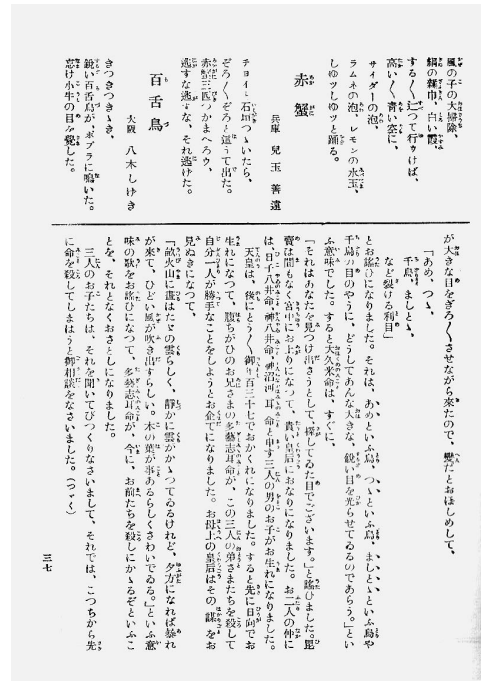


図2 『赤い鳥』4-1 (大正元年1月発行)「毒の大熊」(日本歴史童話)(その七)より
歌謡は改行のある古訓のままの箇所と、地の文に「」で訳された箇所が混在する。

省略等)は、雑誌の行数・字数に合わせて変えていた可能性がある。(図2)

・読者の年齢層を引き下げた可能性がある。『三體古事記』は一般向けでありながら「少年の閱讀すべき場合」をも意識したもののだが、『古事記物語』は「少年少女諸君」を中心に「私のすべての読者諸君」に向けて書かれたため、対象年齢が低めに設定されていたと考えられる。

【雑誌版から単行本へ】

・文や語句の変更・追加、句読点の位置変更、改行位置の変更が多数認められる。雑誌では、行数、文字数にかなり制約がかけられていたと推察できる。毎号、ページ最後の行までびたりと収めているのである。しかも挿絵の曲線に合わせて文字をレイアウトしたページもあり、活字を組むにも厳しい紙面構成であったことが伺える。特に改行の増加は、単行本化にあたってこの制約から開放され、行数、文字数を自由に増やすことができたことが要因だと推察できる。

・雑誌に掲載された後に、読者からの意見投稿によって表現を改めた場合がある。一例を挙げておく。

「宇受賣命の踊り姿にも、無用の御遠慮があるやうです。最初からお乳もお腹も全だしにして踊つたといふことにしても一寸もさしつかへはない筈だと存じます」

(本郷千駄木、○生)『赤い鳥』第三卷三号「通信」欄

三重吉の回答「『おしまひには、お乳や脛すねも全だしにして」と書きましたものも、考慮の上ではなく、たまく私のそ、つかしい理解から『おしまひに』といふつもりで読み下しましたのです。(中略)ともかく、今度まとめて本にするつもりでありますから、その時には、すっかり仰せのとほりに直します。」(同「通信」欄)

【単行本から『少年文学集』へ】

変更箇所の数かなり減っている。ルビの訂正や語句の変更など、細かい訂正のみ行われている。ただし、皇室への冒瀆に関わりそうな箇所を中心に伏字の処理がなされている。

以上のように、三重吉は校正を重ねていったのである。

五 三重吉による「芸術作品」化

三重吉は、『古事記物語』を口語訳と断言するのではなく「藝術的作品」「純藝術品」(『古事記物語』上巻序)等と強調している。雑誌掲載時の、読者投稿への回答(『赤い鳥』第四卷四号「通信」欄)では、投稿者が「御口譯」と繰り返すことに対し、三重吉自ら「先から私のこの童話に對して、古事記の『口譯』といふ言葉が出てをりますが、私の企ては無論『譯』ではなく、その中の主要な筋の再話です」と、あくまでも口語訳では無いと返答している。また「表現上の品位、又は前後との文章の調和を保つて書くこと」「藝術的にも、緊張と華麗とを備へた気分で一貫した物語を書くこと」は容易ではないとし、口語訳として書いていないことを暗に主張している。

単行本発刊の広告欄では、近刊として「古事記傳説全部の純藝術的口語訳」(『赤い鳥』第五卷五号)と宣伝し、発刊後も「一箇獨立の純藝術品として書き上げた點を先生もかなり誇りとしてられます」「純藝術の著作」(『赤い鳥』第六卷第一号)と謳われた。広告でも芸術品であることを強調している。

児童文学研究者の続橋達雄は「厳密な注釈作業、現代語訳であることを拒否し、芸術的立場からある程度自由な再話あるいは歴史物語であることを主張する」¹⁶と的

確に指摘している。

それでは、具体的にどのような『古事記』を芸術作品化(再話)したのだろうか。それは前述の主な相違点①②③④⑤⑥の例のような、削除・省略・追加・言い換え等となるが、何よりも「註解や直譯の臭味」(『古事記物語』上巻序)を無くすことに重点が置かれているのである。それは「註解のために藝術的気分の纏まりを破るのが私には厭でたまらない」と述べていることから伺える。

一方で「とかく與へられた紙面へ過不足なくはめこむために、一旦組み上げた後で、苦しみ々方々を削つたりします」ことから、雑誌掲載時には行数、字数を合わせるために相当手を入れていたことがわかる。

つまり三重吉は、『三體古事記』の俗語訳を元にし、少女少女向けに表現に細心の注意を払いつつも、註解や直訳とならないように考慮し、さらに雑誌の紙幅(および締め切り)に合わせて執筆した。単行本化に当たっては、自身で気付いた間違いを正したり、読者の意見を取り入れたりし、大幅に校正した。一部の副題を変え、話数を追加もしている。そして次の『少年文学集』へは、さらなる細かい修正を入れたのである。

おわりに

前述した森秀人は、「(三重吉は)不器用だから古事記を要約できず、のめり込んで、自分の古事記にしまい、それがこの作品の成功した原因だろうと思う」と述べている¹⁹。しかしながら、不器用さゆえではなく、また、要約するつもりもなかったといえよう。三重吉は自らの表現上の美学、独特の芸術性を過剰に追及することで、『古事記』に手を入れすぎ、あくまでも再話としての『古事記物語』という作品に仕立て上げたのである。

注

1 二〇二三年十月二十日確認

2 作詞家、詩人の覚和歌子による。

3 雑誌では全十五話だが、単行本化の際に第六回を二分割した。さらに三話追加したため、合計十九話となる。

4 恩田逸夫「『古事記物語』の成立」日本児童文学会編『赤い鳥研究』小峰書店 一九六五年四月

5 瀬田貞二「解説」『日本お伽集一 神話・伝説・童話』東洋文庫二二〇(平凡社 一九七二年十一月)

6 桑原三郎「解説」桑原三郎編『鈴木三重吉集』日本児童文学大系一〇 ほるぷ出版 一九七八年十一月

7 森秀人「鈴木三重吉『古事記物語』『正論』一九九三・二四五号 一九九三年一月 恩田、前掲論文

8 省かれた理由は不明である。「海のお宮」初版から十二版までの七年の間に、三重吉は『赤い鳥』で連載を始め、『古事記物語』を刊行している。

9 「古事記物語」現代日本文学全集三十三『少年文学集』(改造社) 一九二八年三月。

10 佐藤宗子「三重吉と『赤い鳥』、その表と裏」『神奈川近代文学館』六三 一九九九年一月

11 小宮豊隆「三重吉のこと」漱石 三重吉 岩波書店 一九四二年一月

12 田中千晶「鈴木三重吉が見た『古事記』—享受史の観点から—」『日本文学』第五十六巻二号 二〇〇七年一月

13 「古事記」には歌謡が一二首あるが、『古事記物語』にそのままの歌謡(訓読文)として掲載されているのは七首。他は詩のように訳されたり、地の文で文章として訳されたりしている。完全に削除されたものも多い。

14 「私はこの物語を、一種の藝術的作品として、少女少女諸君へと共に、私のすべての讀者諸君に捧げる」(単行本上巻「序」冒頭)

15 「與へられた『古事記』などの話出を出来る限り追従し、しかも全體の上に註解や直譯の臭味の少しもない、一箇の純藝術品として表現するといふことは、事實に於て、かなり苦しい拘束でなければならぬ。」(上巻「序」)

16 「私の一種の藝術として評價されるときに拂はるべき、或考慮とに(上巻の序文で)觸れておいた。」(下巻「序」)

17 統橋達雄「鈴木三重吉『古事記物語』考」『野洲国文学』第五十四号 一九九四年十月

18 『赤い鳥』第四卷四号「通信」欄 附録二 一九一五年四月

19 森、前掲論文

From *Kojiki* to *Kojiki Monogatari*:
Suzuki Miekichi's Transformation of the *Kojiki* into a Work of Art

TANAKA Chiaki

Abstract: Suzuki Miekichi's *Kojiki Monogatari* (The Tale of Kojiki) was published in the Taisho period, and even today it is well-known as an easy version of the *Kojiki* (Records of Ancient Matters) written for children. Suzuki Miekichi did not translate the *Kojiki* into modern Japanese, but rather named his work *Kojiki Monogatari*, considering it to be only a retelling. The work was serialized in a magazine, published as a standalone book, and featured in *Shonen bungaku-shu* (Collected Works of Juvenile Literature). Miekichi proofread and revised his work every time it was published. This study examines the process by which Miekichi transformed the original *Kojiki* into a work of art, namely, the *Kojiki Monogatari*.

Key Words: *Kojiki Monogatari* (The Tale of Kojiki), Suzuki Miekichi

概要：鈴木三重吉『古事記物語』は大正時代に発行されて以来、現在でも“子ども向けに優しく書かれた古事記”として著名な作品である。鈴木三重吉は『古事記』を現代語に訳したのではなく、あくまでも“再話”として『古事記物語』と名付けた。雑誌に連載し、単行本として出版し、さらに『少年文学集』に掲載した。三重吉は刊行する際に必ず校正し、改訂している。もとの『古事記』から『古事記物語』へと、三重吉が芸術作品化していった過程を検証する。

キーワード：古事記物語、鈴木三重吉